中野 幸男

諫早勇一『ロシア人たちのベルリン　革命と大量亡命の時代』（東洋書店、2014 年）

「はじめに」に以下のような一節がある。「ベルリンにおける亡命ロシア人たちの生活は、たとえロシア人たちの生活という本流から一時分かれていたとしても、けっしてそのまま枯れてしまうものではなく、やがて本流に合流すべきものだろう。そして、その分流、合流の繰り返しこそ、現代世界のありようとも重なり合うに違いない」（8 ページ）という文章である。この一節は亡命ロシア文学史であるグレープ・ストルーヴェの 1956 年の著作『追放されたロシア文学（亡命ロシア文学）』の有名な一節と響きあう。そこではストルーヴェは同じように亡命ロシア文学とは、ロシア文学という本流の支流であって、やがてその支流は本流に合流し、本流すらも豊かにすると語っている。

本書はベルリンという都市に限定しながら、主として「第一の波」と呼ばれる十月革命以後にロシアを去った亡命者たちの生活に焦点を絞った著作であり、日本語ではこのテーマに絞った類書はまずないと言っていい。主にベルリンの亡命ロシア人の生活を扱ったこの著作の中では「亡命者とは誰か」「亡命者は数えられるか」のような疑問がちゃんと提出されており、吟味されている。

最初の「亡命者とは誰か」という問題については、亡命に関してベルリンでの一時的滞在者としてのマヤコフスキイ、エレンブルグのような本国帰還者、ナボコフのようなソヴィエト政権を憎み続けた亡命者、ケスラーのようなベルリン年代記を残したドイツ人などの海外の視点が挙げられ、彼らにより多面的に捉えられる空間としてのベルリンが語られている。「亡命者」は定義することが難しく、「ロシアという国から自分の意思で逃げ出した（あるいは強制的に国外へ追放された人々）」と著者は仮に定義しているが、1918 年 3 月のブレスト＝リトフスク条約で大幅に領土を失ったソヴィエト・ロシアでは、フィンランド、バルト三国、ポーランドなどが独立したので、これらの土地に暮らしていた人々は地理的には「ロシア人」でなくなってしまったとも言っている。また、1939 年の未来派の詩人イーゴリ・セヴェリャーニンの言葉が引用されている。「自分は亡命者（エミグラント）ではない。難民（ベージェネツ）でもない。自分は別荘の住人（ダーチニク）に過ぎない」（31 ページ）。彼は革命の頃にエストニアのエスト＝トイラに暮らしていたが、革命後にそこはロシアではなくなったために、晩年にも自分を「亡命者」とは見なさなかった。

「亡命者」の定義は定まっていないため、かつて「ロシア帝国」に居住していた人間という地理的な定義からでは、フィンランド、バルト三国、ポーランドなどに住んでいる人々が含まれてしまう。また国外で暮らす民族的ロシア人とすると、「ロシア帝国」に住んでいたのはウクライナ人、ユダヤ人、アルメニア人やエストニア人もいたために矛盾をきたしてしまうという。著者は「同化」の問題にも触れており、フランス人と結婚してフランス国籍を取得した民族的ロシア人がフランス人として暮らし始めれば、もはや亡命ロシア人でもないし、また、ただのロシア語話者が亡命ロシア人というわけでもないという。

亡命者が所持していたパスポートについても細かい説明がある。本文で紹介されている白軍のロシア公使ボトキンによるパスポート、ソヴィエト・ロシアの通商代表部によるパスポートのほか、ナンセン・パスポートについても触れられており、ナンセン・パスポートはマルク・スローニムの回想においても

語られている亡命者と関係の深いパスポートとして知られている。

この著書では最後に現代のベルリンを拠点に活躍する亡命ロシア人作家のヴラディーミル・カミーナーや、建築家のセルゲイ・チョバン、バレエのヴラジーミル・マラーホフ、ピアニストのサーシャ・プーシキンなどが挙げられている。トランスリンガル文学のアドリアン・ワナーの研究書（Wanner, A. (2011). *Out of Russia: Fictions of a New Translingual Literature*. Evanston, Illinois: Northwestern University Press) を読んでいても、ドイツ語バイリンガル作家の出生地を問題にし、世代も多様化している。ロシア生まれでないロシア語話者のドイツ語バイリンガル作家 はアドリアン・ワナーの著書では除外されていた。

ベルリンの亡命ロシア人の生活に絞ったこの本の射程は、あくまで生活であり、文学でも芸術でもない。現在、世界的に広がりを見せているトランスリンガル文学の視点からでは、越境的な問題は一つの都市だけでは拾いにくいために、多少狭いという印象がなくもない。また、それは都市別アプローチという伝統的に研究の蓄積の見られる研究手法の限界でもあるために、今後の現代を含めた諫早氏の研究が、亡命をめぐるこの現状の変化に対してどう対応していくのか見守りたい。